

在外教育施設帰国報告

アスンシオン日本人学校

平成 22～24 年アスンシオン日本人学校派遣

現 網走市立第二中学校 倉田 忠彦

1. パラグアイの概要

(1) 地理・歴史

パラグアイ共和国は南アメリカ大陸の中央やや南にあります。東にブラジル、北にボリビア、西と南はアルゼンチンに接しています。国土のほぼ中央を南回帰線が横切っています。

国土の面積は、日本の約1.1倍です。日本からの距離は約20000Km、地球半周分にあたります

パラグアイの気候はおおむね亜熱帯気候ですが、西側のチャコ地方はあまり雨が降らず、乾燥しているので作物があまり育ちません。おもに牛などの放牧が行われています。

東側は比較的雨も多く森林が広がっています。ブラジルとの国境を流れるパラナ川近くでは、この国の代表的な飲み物「マテ(テレレ)」に使うお茶の葉ジェルバが栽培されています。



1536年スペイン人がアスンシオンに到着。

1811年スペインから独立。

1864～70年対三国(ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ)戦争で国土、人口の半分を失う。

1932～35年チャコ戦争でボリビアに勝利。

1954年クーデターによりストロエスネル将軍が政権を掌握

1989年2月のロドリゲス将軍によるクーデター。1992年ロドリゲス政権で憲法が改正

1993年には39年ぶりの文民政権としてワスモン政権誕生。

2008年4月の総選挙で、野党連盟のルゴ(元司教)新政権が勝利、61年間の赤党政権が崩壊した。

在留日本人約6600人(2010年)

(2) 言語 言語公用語

スペイン語、ゲアラニー語 民族先住民と欧州系の混血 97%、欧州系 2%、その他 1%

(3) 宗教と習慣 カトリック

(4) 経済・産業

主な産業は、大豆小麦を中心とする農業、牧畜業である。特に大豆の生産は世界第4位の生産量を誇る。



国旗のデザインが両面で違う。上が表、下が裏



2・治安に関すること

(1) 一般的治安状況

パラグアイは、南米諸国のなかでも比較的治安がよいとされてきたが、昨今の経済不況などから、日々治安は悪化しています。バス車内でのスリ、車上荒らし空き巣、置き引きなどの犯罪は多く、「自分の身は自分で守る」という心構えを忘れてはいけません。また、邦人の殺人、誘拐等、危険度の高い犯罪も発生しているため、十分注意が必要です。地域によっては、「危険地域」と指定されている都市や場所があるので、事前に確認することを薦めます。

(2) 住宅の防犯対策

住居の防犯対策は重要です。最低でも、塀の上に鉄条網やガラス片を設置したり、窓の鉄格子、二重ロックなどは備え、また、番犬を飼う、警備員を雇用することを勧めます。警報装置を設置するといった対策も有効です。呼び鈴が鳴ってもむやみにドアは開けず、必ず来訪者を確認することが大切です。

3・現地の学校教育事情

(1) 教育制度

一般事情

パラグアイの義務教育は、日本の初等教育(小学校)と中等教育(中学校)を合わせた9年制となっています。義務教育終了後には、普通高校や職業訓練校、教員養成校、そして大学や専門学校などの高等教育に進みます。

年度は2月上旬に始まり、12月上旬に終了し、冬休みは、7月上旬から約2週間、夏休みは12月から2月までの約3カ月間となっています。

義務教育の就学率は約9割ですが、卒業率となると約5割となり、特に農村部では児童就労のために途中退学することが多く、卒業率がぐっと下がる傾向にあります。また、落第制度があり、家庭の事情などにより就学年齢がまちまちなことから、同学年でも年齢が異なることもしばしばあります。

(2) 公立校と私立学校

現地校、外国人学校

<公立校>

公立校は、午前と午後の2部制となっており、中学では夜間部も設置され、3部制としている学校もあります。義務教育の入学手続きは、学校所定の入学申込書に出生証明書(日本人の場合は、戸籍抄本を公証翻訳したものを添付し、入学申し込みを行います。高等教育では、入学試験が実施され、義務教育や高校への日本からの転入には、在学証明書および成績証明書を発行してもらい、外務省と在日パラグアイ大使館の承認を受けた後、パラグアイ外務省で在日パラグアイ大使館の認証を確認、公証翻訳を行い、パラグアイの文部省に提出します。授業料は無料であるが、入学金は必要です。教科書は、義務教育では無料配布されるが、高校などでは書店で購入することとなり、また、ほとんどの学校では制服があります。公立校の予算は非常に厳しく、維持費(水道光熱費、消耗教具費など)は父兄負担となり、バザーなどを開催して資金調達を図る学校も多いです。

<私立校、外国人学校>

市内には、そのほとんどが教会系である私立校や、アメリカンスクール、ドイツ学校などの外国人学校があります。一般的に上流階級子弟は、私立校や外国人学校に入学するケースが多く、また大学など高等教育ではアメリカ、ヨーロッパなどに留学する子弟も多いです。

日系子弟が多い私立校としては、アドベンティスタ系の三育学院が挙げられます。同校には幼稚園から高校まで設置され、日本語クラスもある。アメリカンスクールには、小学校から高校まで設けられており、アメリカのカリキュ

ラムに準じた教育が行われている。また各移住地に日本語学校があり、日系子弟はそこで日本語の勉強に励んでいます。

4・アスンシオン日本人学校について

昭和47年、長期滞在者が、日本語による子女教育を現地にある三育学院栄田祐司院長に要請し、本邦に準じた教育内容を週5日制で実施。

昭和54年度(1979年)

補習授業校に認められ、派遣教員(高橋校長)着任。現地採用教員2名(栄田寛、繁元)と共に3学級編成。

昭和56年度(1981年)

現在地に民家を借用し移転。普通教室3、職員室、会議室その他を設ける。現地採用教員(栄田寛)退職。岸田、中越両教員採用。

昭和57年度(1982年)

日本人学校に昇格。

(1) 児童生徒について

児童生徒数(平成25年度)

学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	小学部計	中1	中2	中3	中学部計	総計
男子	1	1	3	1	3	1	10	1	0	1	2	12
女子	0	1	0	2	1	1	5	1	1	1	3	8
計	1	2	3	3	4	2	15	2	1	2	5	20

☆2013年4月1日現在

(2) 教職員

文部科学省派遣教員・・・校長を含め6名

現地採用教員・・・3名(副校長は開校当時から勤めている)

現地スタッフ(用務員・英会話)

(3) 教育課程

年間授業日数・・・200日を運営委員会で設定。

学期制・・・3学期制

小1から中3まで週35時間(低学年は7時間目は自由に使える時間)

(4) 特色ある教育

(1)英会話

小学校1年生から中学生まで授業が行われる。特に小学生1年は週2回の授業があり、少人数で授業が行われている。英語の音や文字に慣れ、親しんでいるので英語でコミュニケーションを積極的にとることができる。

(2) スペイン語

週 1 時間の授業がある。徹底した会話授業で現地校との交流でもスペイン語で会話ができるほど上達する。また文字の指導も行っているので、小学校 1 年生でもローマ字が読めたり、書けたりすることができる。

(3) 現地校訪問

例年 9 月に行われる現地校との交流「セマナ・デ・ラ・アミスタ」では日本文化の交流、または現地校への訪問をしてでの体験授業などを実施している。児童生徒も大変楽しみにしている行事でもある。



(4) 移動教室

6 月に実施される行事で小 1 から中 3 までの全校生徒が 2 泊 3 日の日程で宿泊する。日系移住地(ラパスやイグアス)やチャコ地方への行き、歴史や自然、文化を学ぶ。



(5) 水泳授業

11 月後半から 2 月下旬まで 3 カ月週 2 回の授業が行われる。レベル別の徹底指指導で全く泳げない児童が最後には 25M を平泳ぎやクロール、背泳ぎで泳げるようになる。また泳げる児童生徒もタイムもあげ、充実した授業が行われている。



(5) 学習発表会

特徴的なのはパラグアイの民族舞踊である「ダンサパラグアージャ」を全校で踊る。プロのダンサーの先生が厳しく教えてくれる。毎年ハイレベルな踊りで、現地の方にも好評である。



(5) 安全管理

海外では常に何が起こるか分からない状況だということを肝に銘じておかなければならない。学校としても安全面に対しては最大限に配慮している。毎月行われる通学路点検で通学路に異常がないか、また道路状況は大丈夫なのかの確認。スクールバスの運転手との情報交換も毎日行われている。

学期に1度行われる通学に関する避難訓練では、いろいろな状況を想定し、大使館と連携をとりながら訓練を実施している。

警備にあっている警察官とは日常的に交流し、連携を図っている。

建物に関しては、気候の変化が激しいので校舎の営繕は日常的に必要な。また蚊を媒介とした「デング熱」の危険があるので、各教室に網戸の設置がしてあったり、蚊取り線香や水たまりを作らないなど細心の注意を払っている。

5・終わりに

3年間という短い期間ではあったが、様々な環境に置かれた子供たちとともに生活する中で、厳しい環境の中でもたくましく、そして一生懸命に頑張る姿に私自身が勇気もらった。また小1から中3までの子供たちがまるで家族のように当たり前のように支えあい、励ましあっている姿に感動をおぼえた。



小さい学校ゆえに保護者の協力は必要不可欠である。そのサポート体制は保護者の皆様が当たり前のよう協力をしてくれ、心強かった。

パラグアイ郊外にある前原城

この学校には開学当初からいらっしゃる現地スタッフの副校長と女性の先生がいる。仕事以外にも我々派遣教員の生活面のサポートを、昼夜を問わず行ってくれる。そのおかげで家族ともども安心した生活を送ることができた。またその先生方のおかげで代々引き継がれたよき「伝統」がこの学校には受け継がれている。



日本全国から集った志の高い、指導技術の優れた先生方とともに働き、毎日がとても勉強になった。特に小学校指導は私には新鮮で、大変貴重な経験となった。中学校だけで勤務していたら気付けないことがたくさんあり、日本に戻った今でもその経験が現場で活かしている。

なかよしだ
いつも並んで日にあたる
パラグアイの旗と日本の旗
24年度 海外子女入選作品

この学校は日本から一番遠い学校ではあるが、日本との心の距離が一番近いのではないだろうか。たくさんの日系人がおり、その方々が築き上げたパラグアイでの信頼が日本人への信頼となり、日本人と言うだけで信頼される。そういう方のたくさんのサポートを受け、生活が成り立っている。一番遠い国に居ながら、たくさんの方から日本への熱い思いを感じ取った。地域と学校が一体となって子供たちのために取り組む姿勢がこれからの日本の教育にも大いに生かされるべきであると痛切に感じた。

ある先輩の先生がこんなことをおっしゃっていた。

「世界一の日本人学校」

この言葉に私も共感する。自信過剰ではない。職員、保護者、そして子供たちがどんなこんな状況にも負けず、頑張り、たくましく生きている。どの学校にも負けないチームワーク。この学校で得た貴重な経験を生かし、北海道の子供たちに少しでも還元していく決意である。

